

第20期 国立市社会教育委員の会 視察（第14回定例会）会議要旨
平成26年7月18日（金）

〔視察先〕 芝の家スタッフ 加藤氏
港区芝地区総合支所協働推進課協働推進係
皆川係長、田頭主任主事（以下、港区事業担当者と標記）
〔社会教育委員〕 立入、猪熊、太田、武澤、矢野
〔事務局〕 津田、清水、藤田

事務局 おはようございます。本日は貴重なお時間いただきましてありがとうございます。

本日は第20期国立市社会教育委員の会が、昨年5月から始まっておりまして、その中で国立市の家庭教育支援の充実について、議論を重ねております。委員の皆様の中から、家庭教育の主体者である保護者が気軽に立ち寄れるような場所ということで「芝の家」というご意見がありまして、ぜひ答申に向けて参考にいたしたく、視察に来たという経緯になります。

当会副会長の立入よりご挨拶を申し上げます。

立入副議長 朝早くからこのような準備をしていただいております。ありがとうございます。今までの話の中で、こういったコミュニケーションをとれるスペースというのがこの国立にもあったらいいなということで、話をみんなで進めてきましたが、具体的にどういう感じなのかというのをうまく伝えていくには見たほうが、「百聞は一見にしかず」ということで、参考にさせていただきたくて参りました。よろしく申し上げます。

事務局 国立市で資料をご用意しました。1枚目が次第、本日のスケジュールと、2枚目が出席者の名簿です。3枚目が、質問事項として3人の委員からいただいたものです。

本日の流れですが、出席者の紹介の後に、港区さん、芝の家さんから施設の概要についてご説明いただいた後、質問や意見交換の場を設け、12時半に終了し、その後、自由にご見学していいとご提案いただいております。そのような流れで本日進めたいと考えております。

では、芝の家の概要を港区芝地区総合支所協働推進課協働推進係主任主事田頭様、よろしく願いいたします。

港区事業担当者 本日は港区が行っている「芝の家」の事業の中身について、計画にも触れながらご説明したいと思います。こちらの印刷されたA4の資料をご覧ください。

こちらの事業は芝の家ということで、知名度としては普及していますが、港区としては「芝の地域力再発見事業」という事業名で行っています。こちらの事業は、自治体で計上している計画の中で行っている事業なので、港区の基本計画にも触れながらご説明いたします。

スライドの右下にページ番号を振っておりますので、2ページをご覧ください。こちらに「『基本計画』とは？」とあります部分よりご説明させていただきます。地方自治法にて、自治体は基本構想を定めるということが法律で定められており、港区では平成14年に『やすらぎある世界都心・MINATO』ということで基本構想を定めて、今まで続けてまいりました。国立市のホームページを拝見し、国立市では『人間を大切にすまち』という基本構想を、私たちは『やすらぎのある世界都心・MINATO』という基本構想を掲げていま

す。

その基本構想で将来像の実現に向けて、こういった施策を行っていくかといったときに、指針となるものとして、本日皆様にお配りさせていただいた基本計画を作成しております。現行の基本計画は平成24年度から平成26年度のもので、現在平成27年度版を作成しているところです。こちらの計画に基づいて、芝の家の地域力再発見事業も行っています。

2ページに戻っていただき、港区の基本計画の特徴として、港区の基本計画は分野別の計画、つまり港区全体としての基本計画と、港区は5地区ございまして、芝、麻布、赤坂、高輪、芝浦港南、その地区ごとに基本計画書、地区版計画書と言われますけれども、こちらのものを作成しております。今、皆様にお配りしているのは芝地区版の計画書です。地区ごとに計画書をつくっているというのは一つの港区の特徴であると思っています。

3ページ目、『地区版計画』とは？』ということで、これは芝地区の計画書ですので、地区の実情や、芝地区特有の課題を踏まえて、その解決方法を中心にこの計画計上を事業としていろいろ盛り込んでおります。オール港ではなかなか浮かび上がってこない課題をつぶさに見ていって、特別に解決していこうといった、課題を計上するために地区版計画書を作成します。

その次に地域事業がございまして、港区全体で行う事業ではなくて、芝地区だけで行う特出しの事業をそのように呼んでおります。地域の課題を地域で解決して、地域の魅力をより高めるために芝地区総合支所が行っていく事業ということで、地域事業という目玉事業を幾つか置いているのですが、その中の一つとして、この「芝の地域力再発見事業」というのを位置づけております。

地域事業の一覧がその下の4ページに書いてありますけれども、12個ございまして、上から5番目の「芝の地域力再発見事業」ということで、置いております。

次に8ページをご覧ください。芝地区版の計画書の中でも大きなカテゴリー分けをしております。まちづくり・環境や、コミュニティ・産業、福祉・保健教育等、そういった大きなカテゴリーのもとに事業を設定していますが、この「芝の地域力再発見事業」はにぎわうまち、コミュニティ・産業関係の事業として置いています。「地域コミュニティの強化」ということで、そこに現状と課題が書いてあるのですが、結局、芝地区でも都心ということで、大規模開発などが進みまして、地域のコミュニティが希薄になってきていると。昔ながらのつながりなどが薄れてきていることによって、震災などもあって、改めて共助の重要性が認識され始めてきて、その中で改めて、こういった地域の人々がだれでも集えるような場所が必要なのではないかということで、そういった地域の人々の交流拠点を設けることを目的に、この「芝の地域力再発見事業」を行っております。

次に具体的な内容ですけれども、10ページをご覧ください。事業の内容としてはそこに記載されているとおりののですが、芝地区のまち並みを生かした交流拠点「芝の家」を中心に、地域に暮らす区民等の交流を促進するために、こちらを設けています。地域住民、事業者、大学等の連携・協力による「地域の見守り」によって、子どもでも高齢者でも、皆様が集まって過ごせるような地域づくりを推進するためにこちらを置いております。

また、計画に記載されている計画目標のところ、「拠点運営の芝三丁目」と「新たな拠点の開設新橋六丁目」と書いてありますが、その拠点の芝三丁目のところがこの「芝の家」でございまして。その下の「新たな拠点の開設新橋六丁目」ですが、こちらは地域事業の中で、交流拠点は芝の家だけではなくて、新橋六丁目にも今年度の4月1日からオープンした「ご近所ラボ新橋」

といった、2つ目の交流拠点を開設しています。そちらの2つの交流拠点をこの「芝の地域力再発見事業」の中で行っています。26年度に開設1拠点、新橋六丁目については24年度から計画、25年度計画・準備、26年度開設ということで、こちらに計上しているとおります。芝三丁目の芝の家に関しては24年度から継続して、始まったのはもっと前になりますが、今までずっと続いているエリアになっております。

最後に、詳しい内容につきましては加藤さんよりご説明があると思いますが、こちらからも簡単に内容に触れさせていただくと、この事業は芝地区総合支所と、慶応義塾大学が「芝地区の新たなコミュニティ創造に向けた連携協力に関する協定」という協定を結んでおりまして、こちらの運営を一緒に行っております。平成20年10月にこちらの芝の家を芝三丁目に設置しまして、ボランティアスタッフが中心となって運営を行っていただいております。新たなコミュニティづくりを進めています。

簡単に平成25年度の主なイベントも書かせていただきましたが、レコードコンサートや、アロマセラピーなど、こういったものは現在も非常に活発に行っているところではあります。

区側からの説明については以上になります。この部分について何かご質問等あればお願いいたします。

事務局 今の内容について何かあれば、ないようなので、次に、芝で子育てプロジェクトの代表をされています加藤様より、ご説明よろしくお願いたします。

加藤氏 おはようございます。ちょっとややこしいのですが、芝の家の事務局を担当している加藤です。芝の家にかかわる中で、芝で子育てしたくなるまちづくりプロジェクトという、小さな地域の活動ですけれども、そういうことをここで出会った方たちと始めて、活動しているという感じです。

芝の家の説明をしながら、芝で子育ての活動についてもその中で触れるという形で説明するのが一番いいのかなと思います。

今、7月の予定カレンダーと芝の家のリーフレット、白黒のコピーになりますが、先ほど行っている最初のお話で、家庭教育の主たる保護者の方の過ごす場所として、母親学級のような講座ではなく、気軽に立ち寄れる場所ということでお話が最初にあったので、そこら辺を意識しながらお話しできればいいかなと思っています。

芝の家は火曜日から土曜日にオープンしてまして、その中で曜日によって計画分けをしています。このお知らせのカレンダーの冒頭のところにオープン時間12時から5時というふうになってまして、その下に火曜・木曜がコミュニティ喫茶、月火木、水曜日・金曜日が駄菓子と昔遊びのあるオープンスペース、土曜日が大人も子どもも誰でもようこそというふうに3パターンに分けて運営しています。

基本的には0歳から上は何歳まででも、どなたでも出入りできる、出入り自由な地域の交流拠点になっているのですが、昨年始めた当初、お子さんのほうが気軽に入ってくる、ここでにぎやかに遊んでいるという風景が最初あったのですけれども、そうすると大人の方はここが児童クラブとか、児童館の小さい版みたいなものというふうに外から見ると思うようで、そうすると大人の方が入ってきにくくなるということがありましたので、少し曜日の性格を分けてみようということで、こういうふうになりました。

これが一番いいやり方かどうかというところはわからないのですが、わりとうまくいっているのかなと思っております。火曜・木曜のコミュニティ喫茶、大人の日って通称呼んでいるのですけれども、その日も別に子どもが入

っちゃいけないというわけではなく、ただ、本日は大人の方がゆっくりおしゃべりしたりすることが一番の日だから、静かに過ごすというか、にぎやかになったときはちょっと声をかけるとかいうふうにしていて、子どもたちもよく来る子たちはそういう認識があるみたいで、本日は何の日だっけみたいなことを言いながら学校から帰って、ここを通過して声をかけて、子どもの日というふうになると、じゃ、後で来るねみたいな感じで運営しています。

土曜日は昨年度からは大人も子どもも誰でもようこそということで、近隣の在住の方でも昼間お仕事がある方のほうが大半ですので、土曜日だけは来られるという方もいたりしますので、大人も子どももということで過ごしています。

対象が0歳から上は何歳まででもということになりますので、この7月のイベントを見ていただくと、誰でもようこその日ですけれども、イベントによってターゲットを幾つか絞ってというか、狙いを持って開催しているものもありまして、例えば5日のレコードコンサートに関しては、芝の家が始まった当初から定例のイベントなのですが、ジャズのレコードを鑑賞する会です、簡単に言うと。そちらの奥にヤマハのスピーカーがあるのですが、この地区の町会長さんがジャズが大好きな方で、そういうレコードのコレクションをたくさん持っていらっしゃってということがあって、じゃ、ぜひここでそういうことをやりませんかということで、続いてやっています。その方が選曲をして、いろいろ小ばなしを入れてくださって、さだまさしのイメージのような感じで、曲の解説とか、アーティストさんについて話したり、これは結構お好きな方が多くて、常連のお客さんが10人前後ぐらいいるのと、あといつもだれかが来るというイベントを持っています。

この空間とちょうどレコードというレトロ感もマッチするというのもあって、わりと皆様がよく知っていらっしゃるイベントになっていまして、これはわりと高齢の方というか、シニアの方をメインに考えているイベントになります。この間も小さい5歳ぐらいの女の子を連れてお母さんがたまたま開催する5日の昼間に遊びに来ていて、夜にこういうのがあるというのを知って、お子さん連れて夜やってきて、一緒に参加されることもあります。

2週目に入りますと、アロマ部、肩タタキ部とありますが、こちら辺はリラクセス系のイベントになりますので、これは老若男女という感じですが。子育て中のお母さんも結構いらっしゃいますし、たまたま知らなくて来た大学生の男の子が体験をして、いろいろおもしろいと思って、アロマ部の人に質問したりとかいうようなことで、マッサージってというのは、アロマ部の方がおっしゃっているのですが、15分とかって限られた時間の中で初めて見る関係でも、肌にさわりながらコミュニケーションをとるので、初めてだけれども、逆に言うと初めてだからこそ、知らない人だから言えるみたいな、わりと深い悩みだったりとか、ちょっとそういう話が出てくることがあるというお話をされていて、そこから根掘り葉掘りということはないですけれども、そういう時間というのはコミュニケーションとしてはすごくいいなと思います。

あとは子ども向け、親子向けということですが、きのうの午前中にマルチカルチャーであそぼというイベントをしました。これは「芝でこそ」で企画しているものなのですが、ここに来ているお母さんの例ですと、だんな様が外国人という方がいらっしゃって、2カ国語で育っているので、特に港区は外国の人が多ということもあるし、ご自分の子どもを育てながら外国語とか、外国人に対しての抵抗感をなくすような楽しい遊びの時間をつくりたいという方がいらっしゃって、その人をちょっとサポートして、今、一緒にそういうのをつくっているところです。

まだ始まったばかりなのですからけれども、ここにたまたま来てくれたフランス人の男の人がいたので、ちょっとお願いして、きのうはフランス語で絵本を読んでもらうというのをやったり、芝の家に来る方にも声をかけながら、それぞれの人の特技をちょっと生かしてもらおうという感じで、歌を歌ったり絵本を読んだりということを中心にやっていて、そういうイベントがあると、名前は知っているけれども、来たことなかったみたいな親子の方が来てくださって、そこを知るきっかけになっているのかなと思っています。

そのような感じでイベントもありつつ、ふだん何にも書いてない日はお昼からオープンして、その日だれが来るかというのは全くわかりません。だれも来ないかもしれないって思いながらいつもあけるのですけれども、だれかしらはわりと来まして、子どもが多くなる日もありますし、高齢者の方が多くなる日もありますし、日によって、集まる人によって起こることも変わってくるというのが一番の特徴かなと思っています。

スタッフの役割としては、まずはだれが来てもウエルカムという感じで受け入れるということと、あとは近所の方で常連の方というのは、入ることにあまり抵抗感はないと思うのですけれども、初めてここを通過して何だろうって思うけれども、入るまでというのは勇気が要るとか、わかっていて来ても勇気が要るという方もあって、初めて来た方とか、1人でぼつんとしているような方がいれば、そこに寄り添うという感じでして、場合によっては興味・関心がつながりそうな方とか、地域が近い方とかというのを話を聞きながら見つけていって、つないでいくという役割をしながら、また来たいなと思ってもらえるように対応するという感じですので、何回か来て、自分の居場所だなというふうに感じていただけると、あまり抵抗もなくよく来るようになってくるので、最初のところを大事にするようにしています。

あとはご質問でいろいろ挙げていただいていたものに答えていくような形で説明をしたほうがよろしいですか。

事務局 そうですね。

加藤氏 質問事項の回答のところから説明していくような感じです。

立入副議長 さっきのレトロコンサートなんていうのは、多分、予期せずみたいなもので、小さいお子さんとお母さんが、おもしろそうだなと思った方が来てくれるようなのは、こういういろいろな企画があってこそ。

加藤氏 そうですね。そんな感じが。だれでも入れる場所なので、イベントをやる場合はイベントに参加しますというお申し込みをとったとしても、申し込んだ人だけが入れますということじゃなくて、常に通りかかったり、本当に近所の人なんかは毎日やっているかどうかというのはあまり関係なく入ってくるので、そういう方も含めて一緒の場を過ごすという感じのことをやっています。そうすると偶発的にたまたま来た親子さんが、前はダンスをやっていたからワークショップをやっていたことがあって、楽器をいろいろ並べていて、楽器を見て子どもたちが自然に遊び始めて、その親子の方はたまたまちょっと駄菓子を買いに寄ったみたいな感じだったので、そのまま2時間、最後まで参加したみたいなことはあります。

あと、学生やボランティア・行政との係わり方を詳しくということですが、この運営のスタッフの部分の話はほかにも出ていたので話しますが、メインでこの場所をあけるためのお当番スタッフとかが呼んでいたりするのですが、それが大体10人ぐらいいます。その中で私を含めて3名が、事

事務局のもろもろの仕事を仕事としてちょっとアルバイト的な、3名でやっています、この10人の中の内訳としては、学生さんが2人、シニアの方が2人、あとは主婦の方とか、学生かシニアじゃない以外の世代の方ということに大体なります。10人プラスほかに10人ぐらい、毎週は来られないけれども、イベントの企画をしたりとか、あと月に1回ぐらい来たりとか、前はちょくちょく来ていたけれども、今はちょっと忙しくなったから、時々来ているみたいな方がいて、全体で20人前後ぐらいが、大きく見るとそういう形になっています。その中の10人がコアで今いる。

委託としていただいている予算の中で、人件費についてはこちらで配分をしていますが、事務局に携わっている3人に関してはアルバイト的な感じで、普通にスタッフのお給料という形で支給しています、あとのほかの方はボランティア謝金ということで、ボランティアに来るのに応じて、1日当たり払える範囲の上限額を決めて、その中でその方が希望される額をボランティア謝金として、要らないという方もいらっしゃいますし、学生さんでアルバイトする時間をこっちに回してやっているという方には多少出して、せっかくだから、それだったらこっちに来てもらったほうが多分いいでしょう。こっちもいいですし、学生さんにとってもいいということで、そういう形でボランティア謝金ということを考えています。必要ない方、例えば特に主婦の方とか、あと引退されている方とかに関しては要らないよという方もいらっしゃいますし、その人の状況にも合わせて、一応これぐらいは用意できますというものをお知らせして、例えば交通費だけくださいという方もいたりしてというふうにやっています。

行政とのかかわりということでは、このカレンダーの中に定例ミーティングというものがありますけれども、週に3回ぐらい平均してやっていますが、そちらの場で皆川さんや田頭さんや、ほかの担当の職員の方が芝の家に来てくださって、スタッフとミーティングをして、運営について話し合うということをやっております。イベントを企画したり、何か楽しいことをするときには、定例ミーティングの場で議題にかけて、相談をするということを決めています。

飛ぶのです。5番の質問のところで年間の運営経費はというところですが、これは今、芝の地域力で芝の家のこの拠点としては950万円の中で運営をしています。

加藤氏 それで、通常はどのように利用されているか。大まかな年齢層なのですが、この拠点運営というくくりの施策でいうと、これは昨年度のをまとめたものになりますが、めくっていただいてページ数が8と書いてあるところに、2008年のオープンから昨年度までの来場者数の中で、お年寄りの方が13%、子どもが35%、大人が52%という内訳になっています。その前の7ページのほうが昨年度の1カ月ごとの来場者数の一覧になっていました、一番右下の数字7,366人が昨年度延べの来場者数になっています。昨年10月以降、月曜日のオープンをお休みして、火曜から土曜に集中させて、いろいろやっていくという形に戻ったこともありまして、少し減っています。

数字についてはこれと、あと必要な部分を拾っていただければ、大体昨年度については網羅されているかなと思うのですが、当初想定されていなかったような利用のされ方ということでは、いろいろあるとは思いますが、1つは在勤の方の利用で、この近隣に住んでいる方はお昼御飯を食べるという形でここを利用する、お弁当を持ってきて。

最初はそういうのはとどうなのかというような話が、区の職員の方ともい

ろいろあったそうなのですが、私、そこら辺は間接的に聞いた話なのであれで、そういうことなのですが、在勤の方も含めて地域で一緒に過ごしているという考え方で、そこからつながる人のつながりということもかなりあって、在勤の方でここによく来場するようになって、実は「芝でこそ」というプロジェクトと一緒にやることになった男性の方は、この近隣の会社に勤めている方でして、最初は通勤の途中でここを通っていて、朝だれもいないときに通って何だろうって思っていて、昼に来てみて、そういうところから私も一緒にやって、子どもの育つ環境づくりということに興味があるという話で、話が次第に出てきて、一緒に何かやりましようみたいなことで声をかけたということなのですけども。

今は夜の時間帯はやっていないので、逆に言うところの近隣に勤めていて、お昼に来るという方が多いのですけれども、よく来るようになると、閉めた後にここで事務作業をしていたりするところに、夕方通って立ち寄りたりという方もいらっしゃるして、オープン時間以外にもいろいろ生まれる余地はあるという話はしています。

けさも朝あけていたので、たまたま前に来場されていて、亡くなられた方が1人いるのですけれども、近所に。その方のお兄さんという方がたまたま何ですかという感じで通りかかって、しゃべっていたら、前に来ていた方のお兄さんだったということがわかってというようなことがあり、そういうのはずっといてうれしいなという感じです。

運営していくうえで、どのような点に難しさがありますかということに関しては、だれでもどうぞという場所なので、来場者の管理という場合ですけれども、そこは気を使う、どういう人なのかということはずごく観察して見ているようにしています。でも、そんなに大きなトラブルは最近はないです。ここの空間が基本的に1人で見渡せる範囲ぐらいの規模なので、例えば死角になるところがあるとか、あと別室があるみたいなことはないのです。それもあってわりと。それで、通りからも丸見えなのでということもあって、だれだれが来る場所であっても、空間的な要素も含めてわりと大丈夫な場なのですけれども、だれでもどうぞなので、基本的にはどうぞって入るのだけれども、場合によってはお断りすることはあります。

矢野さんのほうから9番の質問ですが、集まる子どもの人数ということで、延べになってしまうので、実人数というふうには強調していませんが、先ほどの昨年度の表で見ていただくと、この見方ですが、来場と立ち話というふうになっていますが、来場というのは縁側でも中に入ってきたとなっていて、立ち話というのは学校帰りに、ここが通学路の子どもたちがいるので、ただいまとか言いながら、スタッフとおなじみのある子はしゃべって帰るといったことがよくありますので、それを立ち話というふうに大体カウントしています。平均すると、六、七人ぐらいから10人、11人というふうになっています。こちらのスタッフで名前をわりと把握していて、顔を把握しているというお子さんは多分20人ぐらいいます。

立入委員 常連さんですね。

加藤氏 そうですね。20人のうち10人ぐらいは本当によく寄っていく子どもたちで、ほかの子は時々流れでこっちに来るみたいな感じで、そのほかに親子連れで来たり、ごめんなさい、今の20人というのは小学生以上の話で、それ以外に小さいお子さんはお母さんと一緒に来るといったことがあって、そういう方が多分10人ぐらいいるのかと思っています。

芝の家の校区にある小学校の子ども数ですが、小学校が主に2つ、芝小

学校と赤羽小学校が近隣の小学校になります。昨年のベースで申しわけないのですが、芝小が全校児童305人いまして、赤羽小が418人でして、中学校は三田中学というところがありまして、290人です。その中で20人から30人ぐらいの子が主に利用している。時々駄菓子を買いに母さんと来るみたいな、そんなに来ないけどもという方もいますが、そのぐらいです。

集まる子どもの特徴としては、低学年が中心になっています。あとは高学年、あるいは中高生は少ないのですが、低学年のころに利用していたお子さんが大きくなって時々立ち寄るといった形が多くなっています。

高学年になると、ここら辺の子どもは結構塾に行く子も多いので、塾が忙しいとか言って、塾に行く前に休憩していったりする小学生の子がいます。その子はすごいいい利用法をしているなという感じで、息抜きに来るといった感じでよく来る子もいます。今、6年生もわりと来ているといえば来ていますね。でも、塾に行き始めるとみんななかなかで、中学校に上がると時々お友達を連れて駄菓子を買いに来たり、そのついでにちょっとスタッフと話したりするような感じかなと思います。

保護者の方からの意見ということでは、多分いろいろあると思うのですけれども、児童館とかだと、例えばDS、ゲームは禁止だったりする。この場合は、のさばって、自分たちだけの場所みたいになっていたら注意はするのですけれども、ゲーム自体を全面的にだめというふうにはしていません。なので、そういう意味で子どもにとってはよいということもあると思いますし、保護者の方から見れば、規制してほしいという思いがあったり、逆に言うところそういう場所だから、うちの子は行かせないと思っている方もいるかなとは思いますが、直接的には今はそういうふうにご意見をいただくということはないです。

さっきの塾に行く前に休憩に来る子みたいな話じゃないのですけれども、わりと今、子どもたちもスケジュールが忙しいという子どもが多いので、ここでわりと無目的に過ごせる時間というのは、私としては大事にしてあげたいと思っていて、芝の家として何かということはないけれども、例えばゲームしながら寝そべったりしていることもあるのですね、家みたいに。そういうのは私は言いたくなるので注意するときもある。ただ、スタッフがみんな同じように注意しましょうということにはしてなくて、自分としてちょっとそれはやり過ぎなのではないのかと思うことに関してそれぞれが判断して、声をかける。

でも、やっぱり人間関係ができてないとただ注意する人みたいになってしまうので、基本的にはゲームをしても、意外と話をするとなじみになってきて話したりとか、あと小さい子が遊びに来たりすると、小さい子がお兄さんを知っているとちょっかきを出したりして、結構追っかけ回して遊んだりとかということもしているから一律いけないというわけでもないなというふうに思いながら見ているという感じなのですけれども。

意外と没頭しているようでも周りのこともよく聞いていて、水で遊んだりもするので、水かけやる人とか言って元気な子が言っていると、おれはやりませんけどねとか、なんかつれないことを言っているのですが、関心はあるので、家でただ1人でやっているのとはやっぱり違うということはあるなと思いますし、おじいちゃん、おばあちゃんでも積極的に、何やっているのみたいなことで声をかけてくださる方も時々はいらっしゃったりとかいうことで、それで聞いていると、結構ちゃんと敬語でしゃべっていたりとかいうのがあったり、いろいろあるなというふうに思いながら見ていますので、保護者の方から特別何か、これは困りますとか、こうしてください

というご意見を今はそんなにいただくことはないです。

最初のころは、ここが部屋ということもあるので、結構スタッフもいて、一緒に遊んだりするということがあるので、預かってもらえる場所なのかなという感じに思って、お子さんを置いていっちゃった人がいたり、基本的に自分で外の公園に1人で遊びに行っていていいというふうにしてしている子は、親なしで遊びに来ていいですよということにしていまして、ふだんも保護者と一緒に出歩いているお子さんに関しては一緒にいてくださいというふうにして、そこは最初、徹底してなくて、今はそれがうまく通じるようになったのですけれども、最初のころは最初に来る方にはそれを一々説明しないとというのがあったのですけれども、室内の公園ですとかというふうに説明すると結構わかってくださる。公園には1で行ける子は行けるし、ということでやっています。

大体そんなところで、ほかにいろいろご質問があれば。

太田委員 大体お子さんの様子はわかったのですけれども、どういう大人の方が来られるのかというのをもう少し教えていただけますか。

矢野委員 大人の方多いですよ。すごく多いので、私も後でお聞きしたいですよ。

加藤氏 大人の方は、1つは在勤のこのあたりでお勤めをされている方で、お昼とかに利用される方。あと、近所の高齢者の年齢層に入らないお母さんだったり、子どもがいなくてもシニアではないという方で、女性の方がやっぱりそういう方は多いのですけれども、ちょっとおしゃべりに来たりとか。

矢野委員 複数でいらっしゃいますか。

加藤氏 1人で来る方もいらっしゃいますし、複数で来る場合はこの場所をもともと知っていて、近くからというよりは、ちょっと遠くの地域から見学という形で来る方も結構いるのですね。大体平均すると、事前に申し込んだ方じゃなくても、ちょっと興味があって来ましたみたいな感じの目的を持って来る方は、週のうちで多分五、六人から10人ぐらいはいるので、大人の中に結構そういう人もいます。あとは近所の方で、土曜日の休みの日に来る人とか、よく来ている子どものお母さんですとか、近所のおばあちゃんとか、見学の方が結構多いということも大人の人数が多いという中には含まれるかなと思います。

でも、そこで、きのうもそうだったのですけれども、きのう3組の方が見学っぽい感じでたまたま来て、1人は建築学科で、コミュニティのスペースのつくり方を勉強している学生さんと、もう1人はまちづくりをやっている事務所に勤めているお兄さんで、新潟のほうで仕事をしていて、都内のいろいろな事例を写真に撮ったりして集めているという方と、もう2人は文京区のほうでコミュニティ喫茶をやっていらっしゃる方だったのですけれども、たまたまその人も偶然居合わせて、みんなでお互いの情報とかも交換できたり、そういうのがいつもおもしろいなと思って見えています。芝の家のことを知りに来つつ、ほかのことも知れるというのが多分芝の家の特徴なのかなと思っていて、その日だれがいるかわからないけれども、思わぬおもしろい話ができたいな感じで帰っていく近所の方がいたり、そういうことが起きています。

あとは近所の方で、ここまでは来ないのですけれども、縁側がすごく役割

を果たしてしまして、高齢者の方とかは特に足腰もあまり丈夫ではないというか、そこで腰かけて休んでいくという形で、そのときになるべくスタッフがしゃべるようにしていて、毎日2回ぐらいこの縁側に来る近所のおじいちゃんがいるのですけれども、きのうはおかしくて、笑いをこらえるのに大変だったのですけれども、そのおじいちゃんは本当は92歳なのですけれども、もう1人の方が来て、結構なお年だったのですね。何回か通ったことがあって、しゃべっていたら、お幾つですかとか言ったら、おれは95というふうに言っていて、そのおじいさん同士が結構張り合っていて、へえーとか言って、その92歳のおじいさんが95ですかとか突然言って、私は80ですから、まだまだ及びませんみたいな、ほかの知っているスタッフはみんな笑いながら聞いていたのですけれども、おじいちゃん同士のライバルというか、自分はまだ若いという感じを言いたかったのか。

立入委員 ちょっと強調し過ぎちゃって。もともと知り合い同士ではない？

加藤氏 ちょっと先なので、多分顔は知っているはずなのですからけれども、結構お互いの気持ちの張り合い、何ていうか、そんなになんか……。もう1人のおじいちゃんのほうは、おれんちはすぐ先だからさあとか言って誘っているのですけれども、へえー、あそこは、足が痛くて、遠いからとか言って、行けない、行けないとか言って、なぜか抵抗を示していらっしやっただけです。だから、全員が結構縁側で、高齢者の方同士の交流とか、高齢者とスタッフの方の交流ということがあります。なので、そういう意味も込めて、立ち話というのをカウントするのを大切にしているというのでもあるのですけれども、一応縁側に腰かけたら、もう敷地内だから、来場したことになっているのです。

立入委員 あっ、そうなのですか。では、この立ち話にそのおじいちゃんが入っていないのですね。

加藤氏 多分座っていたおじいちゃんは来場者になるので、ちょっと来て、95歳と言った方は立ち話。そんな感じですから、大人の方は来ています。

矢野委員 スタッフの方のスタンスというのは言葉が変ですけれども、今、お話を伺っても、ここに来て、基本的にあまり声をかけないで勝手にやってもらうというのか、やっぱり来てもらった以上は、1人で来た人は大人であろうとお年寄りであろうと、子どもでも介入するというのは言い方が変ですけれども、結構しゃべるタイプ？

加藤氏 そうですね。

矢野委員 ああ、そうなのですか。寂しい人はいいいですね、ここへ来ると話し合いができて。

加藤氏 そうですね。

矢野委員 では、勝手に1人でじいっとしていなさいよという感じじゃないのですね。

加藤氏 基本的には。でも、そうしていたいという感じがわかれば、そうしていて

もらってももちろんいいという気持ちはあるのですけれども、基本的にはよく来てくれましたねではないのですけれども、そういう感じで、こんにちはと言ってお話をして、なので高齢者の方はおしゃべりをしに来る方が多いですね。

矢野委員 でも、いろいろな話題が要りますよね。おじいちゃんなんかほとんど昔の自慢話とか、嫁の悪口とかなんかよく言う。そんなこと言われて、それでも対応していくのですか。

加藤氏 でも、ここにおいて、スタッフの方もおっしゃったというのが、自分の知らない世界の話をいろいろ聞けるのが楽しいというふうに思って過ごしている方が多いです。でも、意外と話を聞いていると、どんどんいろいろなことが出てきたり、最初は多分疲れちゃうなというような人も、だんだんなれてくると、それがおもしろくなってきたりというのがあると、そういうことをちょっとおもしろがれる人がスタッフに残っているということもあります。

だれが来るかもわからないし、別に用意しておくこともできないですし、来たところ勝負という感じなのですけれども、きのうももう1人別のおじいちゃん、すぐ近くなのですけれども、そんなには来ない方が最初ちょっとしたおしゃべりでスタッフと話していたら、その人が聞き上手で、その人のいろいろなことを聞き出したので、結局1時間ぐらいそこの縁側に座ってしゃべっていくというようなことがあって、それが一番芝の家にあっていいこととか、その中でいろいろな情報も引き出せたりして、何かあったときにはこの人は例えばひとり暮らしだったのかということがわかったり、高齢者の方は実際こういうことに困っているとかいうことがありまして。

あと、赤ちゃんが結構いると、今、事務局のスタッフをしてくださっている方で、1人1歳半のお子さんがいらっしゃる方が一緒に赤ちゃんも連れてきて、できる範囲でということ今やっているのですけれども、赤ちゃんがいるとそこに立ち寄りおじいちゃん、おばあちゃんが増えてきて、外に出かけても急に話しかけたりというのはちょっと不審がられちゃったりするし、抱っこして、久しぶりに抱っこしたわということで元気になっていたり、だからそういうのも最近は感じています。

事務局 やっぱ単純に屋根のある公園ではないですね。

加藤氏 そうですね。スタッフがいて。

矢野委員 わりと勝手に遊んでいますもん。

事務局 公園で遊んでいると、公園はさすがに声かけられるとちょっと不審がられて、ここはそういうのはないのですね。

矢野委員 暗黙のあれなんかあるわけですよ。

加藤氏 確かに知らない人に声をかけていいという前提が、この場所があることで生まれて。

事務局 スタッフの目もあるという安心感ですね。

矢野委員 行政あるしね。それでちょっとプライベートにかかわることで、差し支

えない程度でいいですけども、行政が目指す理念というのは非常にわかるし、今、日本中どこでもやっているのですけれども、物事って何でもそうですけれども、それを担う人材というか、加藤さんは、皆様ちゃんといらっしゃるかどうか。いてもやれるかやれないかという意味では、幼稚園の先生をやっているからいいのですよね。どうしてここに来てやろうと思ったのですか。だって、失礼ですけども、収入的なことを考えたって、スタッフの方がお金要らないよと言うから、相当所得の高い人が多いのかどうかしれないけれども、自分たちだって家族、自分の子どものことだって大切だから、いらっしゃるのにどういうモチベーションというか、思いがあるのですか。

加藤氏 私がかかわったきっかけは、幼稚園にいるときに子どもにかかわることというテーマで、幼稚園というのはわりと閉じられた空間というか、仲間ですね。それよりはもうちょっと子どもが育つ場所として、幼稚園に来る時間も大事だし、学校に来る時間も大事だけれども、それ以外の時間というのも結構あるので、そっちのほうに興味があったということが大きいかなと思います。

それで、最初は芝の家がオープンするという話を聞いて、勤めながら土曜日とかにここでちょっと子どもの遊びの企画をさせてもらったりという、自分も行く行くは幼稚園から出たいという気持ちもあったので、そういう実践の場としても活用させてもらったという感じなのです。

実際、ここで過ごすようになって、子どもだけを対象にするというよりも、もっといろいろな人が意外とかかわれるのだというのを自分でも体感としてわかったので、それでいろいろこういう「芝でこそ」というふうにしてみたりとかいうことを立ち上げて、例えば950万円の予算の中でいうと、1人の人ぐらい食べるのに困らないぐらいのお給料は出せるというのはあると思うのですけれども、それに対して自分自身の経験としても次につなげていけるというか、お金以外の部分での人のつながりだったりとか、経験値ということも含めているという感じですけど。なので、仕事をしながらかわるとなると、なかなか時間をつくれないうということもあるのですけども。

矢野委員 ノルマということではないですけども、来るか来ないかでは困るから、ある程度ローテーションというかあるわけですよね。

加藤氏 そうですね。質問にあったと思うのですけれども、大体1日で、1人その日のリーダーみたいな人がいて、それ以外もう1人ないしもう2人、3人いればわりと来た人の話もちゃんと聞けるし。

立入委員 全体で3名はいらっしゃる。

矢野委員 最低？

加藤氏 2人の日もあります。それで、そこはお互いにスケジュールをちょっと調整しながら、来られる日というので調整しているのですけども。

事務局 では、逆にすごく多い日もあったりしますか。

加藤氏 そうですね。ただ、お互いの入りぐあいを見て、この日はやるぞみたいな微調整をみんながしていて、大体3人から4人、多くて4人ぐらいで回しています。1人という日も時々はあるんですけども、そうすると結構なれて

いる来場者の方とかを巻き込みつつ、その人にも芝の家を紹介してもらおうとか、麦茶を出してもらおうとか、そういうこともやって、そこら辺は逆に役割があったほうが過ごしやすい人というのもいるので、スタッフが少ない多いにかかわらず、仕事をお願いしたりするというのもやっています、一緒につくる場所というので。

武澤委員 場所的に芝の家はかなり南のほうですよ、港区の芝地区の中でも。

加藤氏 はい、そうです。

武澤委員 そうすると、この芝地区の北のほうから来るよりは、例えば高輪のほうから来るとか、芝浦のほうから来るとかいう人もいるのですか。それはまた、それは来ちゃ行けませんとか言うのですか。

加藤氏 そうですね。高輪、芝浦はすごく多いです。そういう方ももちろんあれして、区以外の人ももちろんいいです。世界中どこでもだれでも。時々そうです。港区民じゃないのですけれども、利用していいのですかというふうに入り口で聞かれる方もいらっしゃいます。例えば登録してカードを持っているというような、福社会館や児童館というのとはまたちょっと違う。

矢野委員 フランス人のパッカーがユーチューブかなんかに張りつけたら、結構外国人だらけになっちゃうのだ。

事務局 観光スポットになっちゃうかもしれないですよ。

矢野委員 今、日本でそういうものがありますよね。

加藤氏 東京タワーの近くだしね。

矢野委員 そう。感激してそれを撮って、ぱっとブログで書きちゃったら、そこへみんな外国人が来るようになったとかね。

猪熊委員 非常にくだらしないのですけれども、犬の散歩の人とかはこの辺はあまりいないですか。

加藤氏 います。いい質問だと思います。犬の散歩で通る方もいて、アレルギーのこととかもあるので、室内に上げることはなしという感じにしているのですけれども、玄関先とか縁側とかで交流をされていて、1匹毎日散歩のたびにここに立ち寄るといことが日課になっている犬で、みんなでかわいがっているみたいな感じの面もあります。

立入委員 その縁側の重要性というのは結構あるということですね。

加藤氏 そうですね。

事務局 そうか。中に入るまでは思わないけどというか、敷居が高いけれども、そこなら気軽に立ち寄れるのですね。

加藤氏 あとはそういう意味で1つやっているのは「ご自由にボックス」というも

ので、要らなくなったものを持ち寄って、地域内リサイクルみたいな形でやっているの、そこは定期的ののぞいていく中には入らないけれども、そこを定期的ののぞいていく近所の人というのも何人かいたりします。それを見ている人だとわりとこっちは声をかけやすかったりとかいうことで、今度こんなイベントがあるのですよと紹介してみたりということをしています。

矢野委員　こちらのことは直接関係ないのですけれども、ぱっと見てもあそこにマンションがありますよね。新しい住民の方はあまり交流はないわけですよね。ここは一步入っただけで、あっ、こんなところ、さっき上へ行ったのですけれども、月島とか佃だったりあるのですけれども、意外とこういうところがあつたのだと感じたのですけれども、この中では、旧住民と言ひ方はよくないのかもしれないけれども、コミュニケーションというのはあるのですか。

加藤氏　この町会はこういう古い地域と幾つかのタワーマンション等が含まれているところで、なかなか交流が持ちにくいというのもありまして、町会の役員さんとかとお話ししていると、芝の家があるから、そういう集まれる場所があるので。

矢野委員　では、あそこにお住まいの方もいらっしゃる方もいる？

加藤氏　そうですね。いいよねというふうにはおっしゃってしまして、町会はその中の結束というか、古い住民の方の結束というのわりと残っているほうだと思うのですけれども、この地域は。そこに新しい方が入るとするのはなかなか難しいというか。

事務局　やっぱり公園的な位置づけと。

矢野委員　それは港区全体、これを読ませていただきましたけれども、今、湾岸地域を含めてどんどん新しいマンションができていくから、そういう意味でコミュニケーションって大事なのですね。

太田委員　別のことを聞いてもいいですか。私、3つお聞きしたいことがあるのですけれども、もともとこの芝の家をつくろうというアイデアがどのあたりから、どういうニーズに基づいて出てきたのか。

港区事業担当者　どのあたりからというのは発端みたいな感じですか。

太田委員　はい。例えばどこか別の地域で似たような事例があつて、それを参考にしたとかですね。多分、外国では、わりとこういうスペースを設けているところって結構あつて、アジアでもヨーロッパでも似たような取り組みをしているようなところってあると思うのですが、どこかそういうところからヒントを得たとか、地域コミュニティの強化というところが課題の一つだったという最初のお話があつたのですけれども、それを強化するためにこういう場所が必要だとか、こういう成果が上げられそうだなみたいなところというのは、何か強力にこういうプランを練って提案した方がいたのか、どのあたりからきたのかというのをお聞きしたいのですけど。

港区事業担当者　協働推進課職員の発案です。この辺って、さっきもお話がありま

したように、マンションもあれば、こういった昔からの再開発されない一戸建てもあって、そういう中で要はお互いにだれが住んでいるのかわからない状態になっているというのがあるのです。そういう人たちが手っ取り早くお友達になるにはどうしたらいいのだろうねって、その職員が考えたときに、まず人が来られるような拠点をつくっちゃえばいいじゃないという考え、それはハードの振興に基づいたものかもしれないのですけども。

そうなったときに、それを運営していくためのノウハウはどこからゲットしたらいいのだろうと言って、絶対区ではうまくいかないよねと。やっぱり役所の職員では、なかなかアイデアも出ないだろうと。では、慶応義塾大学の知恵をかりようと言って、慶応義塾大学に話しかけていったところ、慶応義塾大学の経済学部の教授に武山先生という方がいるのですけれども、武山先生と一緒につくったらいいいのではって慶応義塾大学からアドバイスを受けて始めたのがこれなのですよ。

慶応義塾大学の武山先生とあともう1人坂倉先生がここの全体の責任者という形でやってくださっているのですけれども、そのお2人と区の職員とで、では、どうしようと言って、場所がやっぱり大事だよって、場所を探すところから始めたというものなのです。

だから、組織としてこういうのをつくろうというのではなくて個人の発案。それが実際、実現したという珍しい例かもしれない。

太田委員 さっきの加藤さんのお話にもありましたけれども、いろいろなところから見学の方が来られて、別のところでここに倣ったような活動を始めようみたいな動きもきっとあちこちであるのだろうと思うのですが、そういう情報もここに集まってきたりするのですか。ネットワークができていくとか、横のつながりみたいな。

加藤氏 ネットワークをつくるというほどはちゃんと整理はされていないのですけれども。

矢野委員 金沢のほうにはありますね。

加藤氏 ああ、そうですね。先週、金沢のほうからいらっしゃったのですけれども、金沢市自体は学生がいっぱいいるので、学生を生かしたまちづくりという条例をつくられて、それでそういう居場所があるのですけれども、学生が活動された。

矢野委員 それをうちのほうにつくっちゃえばいいのだ。

加藤氏 組織立ってちゃんとやってはいないのでけれども、今、経済学部の武山先生と坂倉先生という代表がこういう居場所づくりとか、地域生活ということを専門にしているので、そのつながりでいろいろ地方に呼ばれたりとかして、またそこで話を聞いた方が向こうに見学にいらっしゃったりとかというような、人と人とのつながりからのネットワークという感じのものはあります。

太田委員 2つの目にお聞きしたかったのが、大学と具体的にどう連携しているのかをお聞きしたかったのですけれども、最初はノウハウを専門の方からただいて、学生もボランティアとして参加して、それ以外に何かあるのでしょうか。

加藤氏 基本的には、最初の3年間は、大学と研究の委託という形での連携でした。学生のボランティアというのも特に、そもそもこのリノベーションをするときに床板にみんなで何か塗るとか、そういうところで武山ゼミの学生さんが大量に投入されたことはあったみたいなのですが、それ以降は自分がやってみたいという学生さん、特に武山ゼミだからということではなくて大学の構内にスタッフ募集ということを呼びかけて、それで自分で来た人たちがかかわっているという形です。

太田委員 現在？

加藤氏 現在もですね。それは1年目からそういうような感じで、最初の立ち上げのいろいろはわりと動員されてきた人が多かったのですが、基本的にはそれをしたいということで、授業じゃなくてかかわって行って、なので慶応の学生はもちろん近いし、多いのですが、時々違う大学の学生さんでこういうことに興味があってということで、それにかかわられる方もいます。

大学とのかかわりという点では、3年は研究委託という形のかかわりで、それ以降は、今ここの芝の家の事業を受けているのが三田の家という名前の、三田の家有限責任事業組合という団体なのですが、もともとは三田の家という場所があったのですが、昨年いっぱいこの場所自体は閉じたのですね。

ただ、組織の名前としてでも三田の家LLPという有限責任事業組合というものがありまして、そこで三田の家を運営していた。そこに武山先生ほか何人かの大学の先生たちが集まって、大学のある地域の中にもっと出ていける場所をつくろうということで、わりと有志で集まって始めた活動が少し大きくなってとか、軌道に乗って、先ほど皆川さんから話がありました、港区のほうから慶応義塾大学に何か一緒にできませんかという話があったときに、三田の家をやっているチームの人たちだったら興味を持ってきて、おもしろいのではないかとということで、大学の中で武山先生をはじめとする三田の家チームに声がかかったという経緯があって、今、そのまま運営の委託というのは三田の家LLPで受けているということになっています。

立入委員 それは最初から企画段階、三田のところからいらしたのですか。

加藤氏 企画段階からはいなくて、その企画が実際にこういう場所で、こういうことをやるという話が出たぐらい。

立入委員 もうでき上がったとき？

加藤氏 もともと三田の家にちょっと出入りをしていたので、そういう話を聞いていて、子どもも来る場所になるだろうから、何かできるのではないかってことで誘ってもらって、来始めたということです。

矢野委員 細かいことですが、ここの賃貸借契約の契約者も三田の家になるのですか。

加藤氏 そうです。

事務局 では、区からの委託先もその三田の家なのですね。

加藤氏 そうですね。

矢野委員 先ほどの研究委託、3年間やられる、その報告書というか、論文という
か、そういうのは。

加藤氏 はい、あります。

武澤委員 先ほどからここにこういう芝の家をつくって、情報を発信するというの
で、こんな効果があったよというのがあります？

港区事業担当者 マスコミからの取材はかなり多いのですね。事業者というか、私
がここで取材を受けたのって、自治体さんもそうですけれども、大学が結構
多かったのですよ。だから、同じようにこういった地域の交流拠点をつくり
たいという人たちが世の中にいっぱいいるのだなというのがわかるのと、そ
れの手助けができたのかなというところは貢献できたのかなと思っている
のです。

国立市さんだと、一橋って可能性あるのかなとか。

立入委員 確かにそうですね。一橋の「こたの」で。

事務局 KFはそうですね。今も話していたのですけれども、KFの動きは似たよ
うなスタートだったのですけれども、今現在の運営とかはまた別な感じでし
ょうか。

立入委員 でも、その先生をお招きして、講座を開いたという話を聞いて。

事務局 そうですね。もともとはそうでしたね。結構学生がスタッフで入っていま
すね。

太田委員 あれはコミュニティビジネスみたいな感じで、学生が責任を持って、「こ
たの」の陰の店長も私の知り合いの学生がやっていたと思うのですけど。

事務局 ああ、そうですか。今現在ですか。

太田委員 今現在。結構あれは大学がかなりかかわっていると思うのですが。大学
だけじゃないので、ほかの地域の方と一緒にチームをつくってやっていると思
うのですけれども、採算とれなきゃだめだと市のほうからはいつも言われ
て。

加藤氏 「芝でこそ」についてはこういう冊子が、ここで起きた地域の活動という
のをまとめて、2011年5月なのですが、1冊お渡ししておきますので。

事務局 ありがとうございます。

港区事業担当者 組織なのですから、お当番という形で入っているのが10人
ちょっとなのです。ただ、イベント企画したりするのはそれとは別にいる
のです。

それこそ近隣の会社員さん、OLさん、若者もいるという形で、役割分担もできているなということと、スタッフとは言っていないけれども、ここにしょっちゅう来て、スタッフのかわりのことをやっている人もいるので、はっきり言うと、何人いるのだからよくわからないのですよ。みんなで作っている芝の家といった感じになっています。

事務局 その辺を総合的にしているのが一応三田の家ということで全部やられているのですか。

港区事業担当者 それは事務局で。

事務局 そこで考えて、いろいろな各団体やNPOもいろいろな事業を決め合ったかと思うのですけれども、そういう調整をしている形ですね。

港区事業担当者 はい。大体事務局の3人で。いろいろなところで活躍しています。

事務局 やっていくという形なのですね。

猪熊委員 子どものほうからと大人とか、どちらが多いのですか。

港区事業担当者 大人です。圧倒的に大人です。

立入委員 今年で3年とか4年目ぐらいなのですか、ここができて。

港区事業担当者 ここは20年にできたので、6年です。

立入委員 じゃ、もう第2部に入っているという感じなのですね。

港区事業担当者 というところかなって。やっぱりある程度やっていくと、最初の人たちがいなくなるので、この理念というのがうまく伝わらなくなるのです。

事務局 ああ、なるほど。必ずあるものですよ。

港区事業担当者 そうなのですよ。必ず落ち込むのですよね。

事務局 ただ、どんな状況であれ、今おっしゃったように、最初の理念があって、スタートし始めて、そこに当然近隣の人たちが利用する利用のニーズもあって、変化をしていくじゃないですか。そうすると、スタッフがかわったりすると、当初理念とは若干ずれているけれども、ニーズに応えるような形というのが生まれたときに、それはそれで、役所としてはそういうことがここに求められているのだったら、それがコミュニティを育てているのだったら、いいという考え方なのですね。

武澤委員 僕も若いころ、この三田国際で仕事やっていたのです。だから、本日ここへ来るまで、ここはかなりハイカラなことをやっているのだろうと思って来たのです。期待していたのです。

港区事業担当者 ものすごくレトロです。ベタです。

武澤委員 ですね。そう思って、なるほどそうだろうと。そうすると、こういう昼間勤めに来る人と、それからこういう定住民にはかなりの格差があるなど。こういうのだって定住民を主体にして、まずはつくっていかなくちゃならない。

港区事業担当者 形はそうですね。

武澤委員 それから、今度どんなのをするかなど。

事務局 なので、在住よりも在勤のほうが多いという感じ。

加藤氏 本日は多分あまり子どもは来ないのですよ。本日は終業式なのですけれども、本日は防災体験会というのを赤羽小学校でやるので、みんなそっちへ参加しちゃうので来ないだろうなと思って。

立入委員 じゃ、ちょうどよかったかもしれないですね。邪魔しちゃってもかわいそうですね。

港区事業担当者 子どもが来て、それを見てもらいたいなというものもあるので。

太田委員 そうですね。

猪熊委員 わりと子どもの利用時間としては少ないですよ、10時～17時といううと。

港区事業担当者 そうですね。ただ、5時になったら帰さないで。事故にもなるので。

猪熊委員 もちろんそうですね。なんですけど、どっちかという、大人の人のほうが利用する時間帯としては長いのですかね。

港区事業担当者 そうですね。大人でも、5時だと在勤者はほとんど使わないという問題がありますよね。多分ママさんが多いです。

猪熊委員 先ほどのシニアではないけれども、子どもがいなく、大人の人っていう、一瞬にしてちょっとわかりにくかったのですけれども、それはママさんなのでしたっけ、何かありましたよね。

港区事業担当者 スタッフのかわりにいろいろやってくれているのは、40代の男性です。ひとり暮らしの人たちこそ、もっといたほうがいいのではないかと思います。

太田委員 そういう人たちが来てくださらないと、昼間働いている人はこういうところにかかわれない。そういう人が集まる場所が必要です。

事務局 でも、先ほど1歳半のお子さんをお持ちのお母さんがとおっしゃっていたのがすごいなと思ったのは、保育園に預けて仕事に行くお母さんは来られないですね。ですが、家で子どもを育てて、まだ保育園や幼稚園ではなくてというお母さんがずっと子育てだけしていると息詰まっちゃうような、地域に知り合いのない方には、お子さんも一緒にできるというのがすごく魅力的だなと思います。

立入委員 ご本人も勇気が要ったでしょうけどね。

事務局 おありなのだと思います。

立入委員 でも、そうやって皆様に育ててもらえますよね。

事務局 そうですね。地域でね。昔はよくあった地域で子どもを育てることがここでできるのですね。

港区事業担当者 これの裏側に芝でこそ「マルチカルチャーであそぼう」というのが右側にあるのですけれども、これは一切1人のママさんが企画しているのですよ。

太田委員 もっと利用が増えるといいなという話はあるのですか。それともこのぐらいでいっぱいいっぱいだっていう感じですか。

港区事業担当者 このキャパシティは、多分1日40人ぐらいかなと思っているのです。狭いので。

太田委員 そうすると、地域の事業としてやっているとしても、かかわっているのはほんの数%くらいというふうになりますよね。

港区事業担当者 というふうにはなっちゃいますよね。だから、ここだけが活動の場所ではないと思っていますので、ここで知り合った人がほかのところでやってくれてもいいじゃないという、その接着剂的役割があればいいのかなと思っています。

とりあえずあちらの格子のところにご近所ラボ新橋とって、ここみたいな交流拠点を4月から立ち上げたのです。そっちでも活動してもらえればなと。あっちは立ち上げたばかりで、さらに区の施設の中なので、こういうような自由度がないのですよ。なので、ちょっと苦しいので、今、テコ入れ中です。

事務局 そうすると、芝地区総合支所としては、こういう芝の家とか、ご近所ラボ新橋のような拠点施設を増やそうという方向なのでしょう。それとも、ここからスタートした方たちが、個人の力や連携により地域でやっていってほしい、そういう人を育てる空間としての位置づけなのですか。

港区事業担当者 後者ですね。とりあえずこの2カ所で大丈夫かなと思っています。

地域活動を自分らでやっという人材を養成する講座を今始めているのです。ご近所イノベーター養成講座という名前で去年20人やりまして、地域活動を自分でやってくれと。リーダー養成じゃなくて、自分がこれほどいいなと思うことをやって、それをほかの人たちにも波及させていこうという講座を始めまして、今年、先日始めたので、そこの受けている人たちが体験という形で芝の家に来たりします。

事務局 国立だと高齢者の方のたまり場だったり、そういう場というのは結構あったりするのですが、子どもを持っている世代が集まるような働きかけとか、工夫とかされていたりってあるのですか。

港区事業担当者 なるほど、なるほど。それってどこの自治体もそうなのですか、子どもの施設と高齢者の施設なのですか。真ん中が一切ないのですよ。うちも当然ないのです、そういうのが。区民センターとかいうのはあるけれども、そこはただの貸し部屋なのですよ、ある意味。

事務局 公園的だというのが多分いいのだと思うのですが、それを運営する団体もあるからいいのですよね。そこが難しいことだと思う。今の話で、例えば地域集会所は多いのですか、この芝地区は。

港区事業担当者 町会の建物や集会所はありますけれども、俗に言う公民館的なものは全然ないのですよ。公民館ってだれでも行きますね。でも、港区の場合は子ども中高生プラザといきいきプラザ、その2つに二極分化されちゃっているのです。

事務局 あと部屋を、例えば自分たちのサークルなり何なりで借りられるような場所というのは結構多いのですか。

港区事業担当者 それは区民センターの中にありますし、いきいきプラザの中の集会室は一応だれでもお金を払えば借りられると思います。だから、それってグループ化された人たちが使う場所で、それから仲間をつくっていこうとなるとなかなか難しい。

立入委員 そういう目的もなく、ただ単に居場所としてあるというのはとても新鮮ですよ。何かをしたい人ばかりでもないじゃないですか。ちょこっと立ち寄って、人と話をしたいという人って結構いると思うので、さっきの縁側の話じゃないですが、重要なものになって。

事務局 縁側の延長みたいな感じなのですかね。

立入委員 まあ、そうですね。

港区事業担当者 それは大きいですね。

太田委員 国立の場合は社会教育にかかわってこられた、結構こういう活動になれている方々がいるのではないかと思います。公民館以外に何か活動できる場があると活躍していただけるのではないかと思います。もちろん学生はたくさんいますし。

事務局 多分、逆にそういう方を生かす場所が公民館以外にないという現状です。

太田委員 以外に何か新しいタイプの場所があればいいと思うのですよね。

矢野委員 ターゲットを絞るってみんなすぐ言うけれども、絞っちゃうと一体的にならないのです、有機的に。

事務局 むしろ絞ってないからこそですね。

矢野委員 そもそも人間って、そんな便宜的に生きているだけじゃないですもんね。

事務局 そんなにカテゴライズされるものでもないでしょう。

立入委員 だから、そのご縁ですよ、本当に。言葉で言えばね。だから、それが生かされる空間ということですよ。

矢野委員 それとか、そういう思いを持っている人がいるかいないかって大きいですよ。やってほしいという人はいっぱいいるけれども、自分がやれと言ったら、結局忙しくて、私はそんなこれ以上できませんって。

港区事業担当者 だから、うちのスタッフは週1回という人たちが多くいます。そういう人たちをうまくマネジメントしていく役割の人がいれば大丈夫です。

立入委員 人の価値は高いですよ。

港区事業担当者 人材の財は財産というね。

武澤委員 ああ、そうですね。

矢野委員 例えば3人集まれば3人いればだんだんできると思うのですよね。

太田委員 私はぜひもう少し国立でも大学と連携できればと思いますし、私自身は大学にもっとこういうのをやればいいと思っているところがあるので、国立市と一緒に大学当局にプッシュできるって、すごく可能性があると思うのですが。

港区事業担当者 桜の保全をやっていましたね。

事務局 やっています。

港区事業担当者 あれ活用できないかなって。よくあるのは空き家ですよ。

事務局 今は国立でも空き家対策というのは課題にはなっていくので、そういう意味では多分ハード的なものも、諸整備はあると思いますし、予算的な問題もあると思うのですけれども、多分そういうのは何とかすぐというか、いきやすい部分はあると思います。しかし、加藤さんのような方や、継続的に運営をしていく中心になるスタッフさん、要は役所にあまり負わないで、自由にやっていただける方たちがいるということが、そういう地域人材力があることが長生きできる理由だと思います。どうしても役所がやると役所らしく

なってしまうのです。

立入委員 そうですね。だから、有志みたいな人ね、私、これやりたいてっていう加藤さんのようなタイプの人がちょうどいたというのは結構大きいのではないですか。

港区事業担当者 それはありがたいですね。そういう人たちがちょっと減っちゃったので、スタッフ全体が減ってしまったというのもあります。

矢野委員 来るときちょっと話したのですけれども、当たり前ですけれども、今、財政難でみんなどこも大変だって言うけれども、港区は財政力は、指数はいいでしょう。

武澤委員 裕福だもんね。

矢野委員 NECさんもあるし、みんな法人がね。

港区事業担当者 法人税は入らないです。住民税だけです。

矢野委員 タックスヘイブんだ。

事務局 ほかになければ。お忙しいところ本当にありがとうございました。

全 員 ありがとうございました。

— 了 —